

# フェイクニュースの真偽判断に影響する要因の検討

## Factors Affecting Judgments of Authenticity of Fake News

大井 京, 小野 奨太  
Misato Oi, Shota Ono

近畿大学

Kindai University

oimisato@gmail.com

### 概要

本研究では、フェイクニュースの真偽判断に関連する要因として、1. 常識、2. 実現可能性、3. 信念、4. 画像のリアリティを取り上げた。実際のニュースとフェイクニュースに対して「真実」か「フェイク」かの真偽判断を求める調査を実施した結果、「常識」と「実現可能性」が、それぞれ「信念」と「画像のリアリティ」よりも、「画像のリアリティ」が「信念」よりも判断の根拠とされる傾向が確認された。

キーワード：フェイクニュース, 真偽判断

### 1. はじめに

現在、日常的なインターネットの利用とインターネットからの情報の取得が、世界的な規模で一般的になっている。しかし、インターネット上の情報はすべてが正しいとは限らず、日々、私たちは情報を得る中で、どの情報が正しいのか正しくないのかの判断を暗黙のうちに求められている。

近年、英国のEU（欧州連合）離脱や米国の大統領選挙などで、インターネット上に虚偽の情報が大規模に拡散され大きな問題となった（笹原, 2018）。また2022年に始まったロシアによるウクライナ侵攻においても、インターネットにおける虚偽の情報の軍事的な利用が注目を集めている。本稿では、これらの虚偽情報のなかでも、ニュース報道の体裁を取った虚偽情報に注目し、これを「フェイクニュース」として検討の対象とする。これまでに、フェイクニュースを見抜くために、情報の読解力であり、メディアに対する知識、批判的思考、デジタルリテラシーなどからなる複合的スキルであるメディアリテラシーの重要性が指摘されている（e.g., 笹原, 2018; Craft et al., 2017）。

本研究では、我々がフェイクニュースを構成する情報のどの要素に注目し、何を根拠として「真実」か「フェイク」かのいずれかを判断しているかを、検討の対象とする。

メディアリテラシーには、メディアの批判的分析が含まれる（e.g., 鹿島, 2020）が、日常的に我々が情報を判断する際には自身の持つ「信念」や「常識」に基づいている場合がしばしばある（Ray, 2011/2013）。また、

フェイクニュースには、通常の報道と同様にしばしば画像を添付したものが多く、これらの画像のもっともらしさ（リアリティ）がフェイクニュースの真偽を判断する一つの要因であることが考えられる。本研究では、フェイクニュースの真偽判断に関連する要因として以下の4点を取り上げた。

1. 常識：内容が常識的である
2. 実現可能性：内容が実現可能である
3. 信念：内容が自身の信念に近い
4. 画像のリアリティ：添付画像のリアリティが高い

本研究では、これらの4要因のいずれがフェイクニュースに対する真偽判断の根拠とされているのかを、web アンケートを実施することで検証した。

### 2. 方法

#### 2.1. 実験参加者

Web アンケートへ有償（約100円）で回答することに同意した100名（男性47名、女性53名、平均年齢36.2歳）が本調査に参加した。1名が質問に回答していない不備があったため、当該の1名のデータを分析からは除外した。

#### 2.2. 手続

Web アンケートは2部で構成されており、第一部は、海外で実際に報道された6種類のニュースを日本語での短い文章（140字以内）に翻訳し、当該のニュースで使用されていた画像1枚とともに実験参加者に呈示し、実際のニュースであるかの真偽の判断を求めた。6種類のニュースのうち4種類は実際の報道ニュース（「実際のニュース」とする）であり、2種類はフェイクニュースであった。

第二部では、第一部において、ニュースを判断した根拠として適切な選択肢を表1に示した8種類から選択するように求めた。その際、複数選択が許可されていた。

た。

表1 判断の根拠

要因	選択肢
常識	内容が常識的に考えて馬鹿げているから
	内容が常識的に考えてもっともらしいから
実現可能性	内容が実現することが不可能と考えたから
	内容が実現可能と考えたから
信念	自分の信念に近い内容の記事だったので
	自分の信念に反する内容の記事だったので
画像	記事内に掲載されている画像にリアリティがあったから
	記事内に掲載されている画像にリアリティがなかったから

### 3. 結果

6種類のニュースに対する実験参加者の正答率は、実際のニュースは43.43% (SD=24.25%)、フェイクニュースは74.24% (SD=28.75%)であった。6種類のニュースの正答誤答全てを含めた判断に対して、4種類の要因いずれに基づいて判断したかの割合(全反応数:779)を図1に示す。

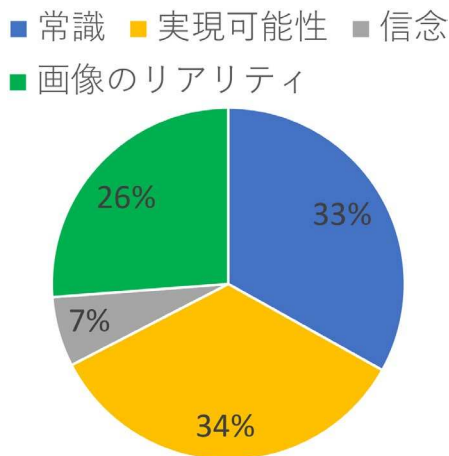


図1 全反応における判断の根拠の割合

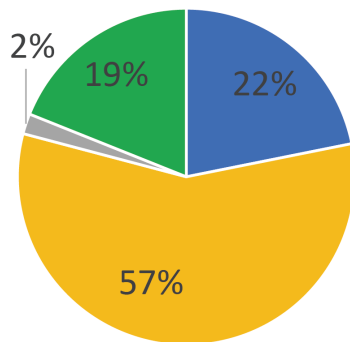
$\chi^2$ 乗検定を実施した結果、有意な割合の差が確認された ( $\chi^2(3)=155.37, p<.01$ )。多重比較の結果、「常識」と「実現可能性」に基づく判断の割合が、それぞれ、「信念」と「画像のリアリティ」に基づく判断よりも有意に多いことが確認され、「画像のリアリティ」に基づく判断が「信念」に基づく判断の割合より有意に多いこ

とが確認された ( $ps<.05$ )。

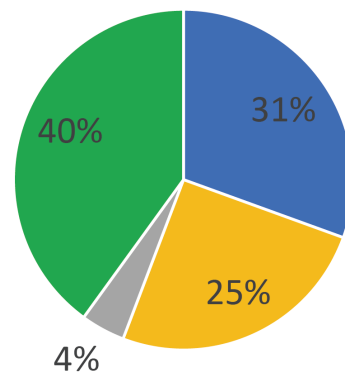
正答反応である、実際のニュースに対して実際のニュースであるとの反応と、フェイクニュースに対してフェイクニュースであるとの反応における、判断の根拠の割合を図2a, bとして示す(実際のニュースの反応数:206; フェイクニュースの反応数:190)。

正答反応の判断の根拠の割合について、2(実際のニュース・フェイクニュース)×4(4種類の判断の根拠)の $\chi^2$ 乗検定を実施した結果、有意な割合の差が確認された ( $\chi^2(3)=43.82, p<.01$ )。残差分析の結果、実際のニュースに対しては、フェイクニュースよりも「実現可能性」に基づいた判断の割合が有意に高く、フェイクニュースに対しては、実際のニュースよりも「常識」と「画像のリアリティ」に基づいた判断の割合が有意に高かった ( $ps<.05$ )。

■ 常識 ■ 実現可能性 ■ 信念 ■ 画像のリアリティ



a. 実際のニュース



b. フェイクニュース

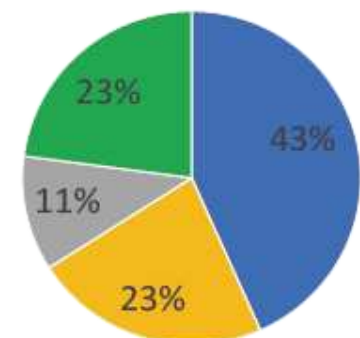
図2 正答反応における判断の根拠の割合 (a. 実際のニュース ; b. フェイクニュース)

誤答反応である、実際のニュースに対してフェイクニュースであるとの反応と、フェイクニュースに対し

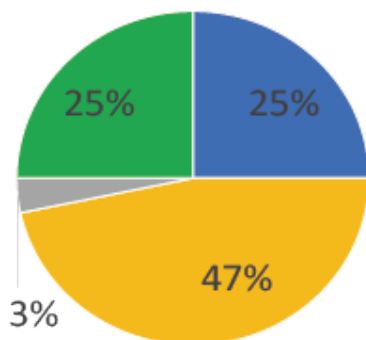
て実際のニュースであるとの反応における，判断の根拠の割合を図 3a, b として示す（実際のニュースの反応数: 323; フェイクニュースの反応数: 60）。

誤答反応の判断の根拠の割合について，2（実際のニュース・フェイクニュース）×4（4種類の判断の根拠）の $\chi^2$ 乗検定を実施した結果，有意な割合の差が確認された（ $\chi^2(3)=18.53, p<.01$ ）。残差分析の結果，実際のニュースに対しては，フェイクニュースよりも「常識」に基づいた判断の割合が有意に高く，フェイクニュースに対しては，実際のニュースよりも「実現可能性」に基づいた判断の割合が有意に高かった（ $ps<.05$ ）。

■ 常識 ■ 実現可能性 ■ 信念  
■ 画像のリアリティ



a. 実際のニュース



b. フェイクニュース

図2 誤答反応における判断の根拠の割合

(a. 実際のニュース ; b. フェイクニュース)

#### 4. 考察

調査の結果，実際のニュースを実際のニュースと判断した正答反応と，フェイクニュースをフェイクニュースと判断した正答反応において，実際のニュースでは「実現可能性」に基づく判断が，フェイクニュースで

は「常識」と「画像のリアリティ」に基づく判断が有意に多いことが示された。これらの結果は，実現可能性が高ければ実在のニュースとして受け入れられやすいこと，常識に合致しないことや，画像のリアリティの低さによってフェイクニュースと判断している可能性を示唆する。

実際のニュースをフェイクニュースと判断した誤答反応と，フェイクニュースを実際のニュースと判断した誤答反応において，実際のニュースに対しては，自身の常識に合致しないとフェイクニュースだと誤ってみなし，フェイクニュースに対しては，実現可能性が高いと評価できる際には，実際のニュースと誤ってみなす傾向が示唆された。

正答反応と誤答反応の結果を総合すると，実現可能性が高いと評価できる際には，実際のニュースでもフェイクニュースでも，実際のニュースであるとみなされ，常識に合致しない場合は，実際のニュースでもフェイクニュースでも，フェイクニュースであるとみなされる傾向が示唆される。また，これらの結果は，実際のニュースと判断する際と，フェイクニュースと判断する際には，異なる認知的メカニズムが働いている可能性を示唆する。

これらの実現可能性と常識に基づいた判断傾向と認知的メカニズムを考慮することで，デマやフェイクニュースといった誤情報による扇動をより受けにくくなるメディアリテラシー教育が可能となると考えらえる。

#### 文献

- [1] Craft, S., Ashley, S., & Maksl, A. (2017). News media literacy and conspiracy theory endorsement. *Communication and the Public*, 2(4), 388-401. <https://doi.org/10.1177/2057047317725539>
- [2] 鹿島千穂 (2020). フェイクニュースに立ち向かうためのメディアリテラシー教育の有用性 実践女子大学短期大学部紀要, 41, 1-11. <https://doi.org/10.34388/1157.00002073>
- [3] 笹原和俊 (2018). フェイクニュースを科学する 拡散するデマ, 陰謀論, プロパガンダのしくみ 化学同人
- [4] William J. Ray. (2011). *Methods Toward a Science of Behavior and Experience*. Wadsworth Pub Co.  
(W.J. レイ著 ; 岡田圭二 (編訳) (2013) . 改訂エンサイクロペディア 心理学研究方法論 北大路書房)